

大津百町瓦版

大津・町家・まちなか・いろいろ情報

新年号 [No. 35]

2018年 1月

発行 大津の町家を考える会

大津市中央1丁目8-13

TEL・FAX 077-527-3636

Email: otsu.machiya@gmail.com

イメージしやすい大津のために



【 大津歴史博物館図録『家族の一世紀』より 】

とが交差している構造が理解できた。その知識の上に、大津歴史博物館の図録『家族の一世紀』に掲載された航空写真を目にした。昭和 30 年代であろうか、浜通が寺町通と交差する一帯に朝日生命（旧八幡銀行）、滋賀銀行、日本勧業銀行（旧滋賀農工銀行）が連なり、それらに小さな広場を向けて市庁舎が建つ。その湖側には大津公会堂が控える。この風景を見たとき、「ああ、こういう町だったんだ」と了解できた。そして、この空間構造を頭に入れて町を歩くと、それまで見えていなかった往年の残像が浮かび上がってきたのである。

K. リンチの『都市のイメージ』という書物がある。景観学の古典で、都市のイメージしやすさを生む要素として5点を挙げている。そのなかにパス、すなわち通行路があり、またディストリクト、すなわち境界がある。道みちの風景が頭に刻まれ、区域の特性がのみこめれば、その町は一举に把握しやすくなる。そのための情報の発信と景観の整備を大津の町は必要としている。自分の学習過程に照らして、そう痛感するのである。

石田 潤一郎

（京都工芸繊維大学教授）

私にとって昔から大津は空間の構造がつかみにくい町だった。街路も建築もどこか茫漠と散らばっている感じといえよいか。彦根だと、城へ向かう強烈な求心性が町々を統御している。長浜であれば、船板塀、土蔵造り、大伽藍と、さまざまな歴史的な都市のエレメントが展開する。そこへいくと、大津はとりとめがなく感じられる。

長く近代の洋風建築の調査をやっていると、所在しそうな場所に近づいたとき、「この辺、ありそう！」という「匂い」を感じる。しかし、大津の場合、たとえば大津市公会堂でも、唐突にそこにあるという印象をぬぐえない。

しかし、遅まきながら「大津百町おもしろ発見地図」と「まち遺産マップ」を購入した。おかげで「浜通」「中町通」「京町通」の東西方向の3街路と、「八丁通」と「寺町通」の南北街路

道路拡張でなくなる町家

北国海道に面する通りに以前から気になっていた住宅が建っていました。その住宅は見越しの松が印象的な品の良い住宅です。この住宅のほぼ向いにも同じ様な住宅があって、拡張が進む道路を見ながらこれも取り壊されるのか残念だなと思っていたところ、東側の住宅は一昨年壊され前の道路予定部分を空けてその奥に新しい住宅が建てられていました。残された西側の住宅がいよいよ気になりだし、北国海道を通る度に入口の格子戸に顔を付け中を覗いて見ると、玄関入口の細工、勝手口の造作、表庭に面したガラス戸や軒の造り等々が素人目に見てもこれはなかなか良いお宅だなと思って見ていました。なかなか訪ねる勇気もなかったのですが、このお宅こそ「町家を考える会」の瓦版に残しておきたいと10月に思い切って訪問しました。

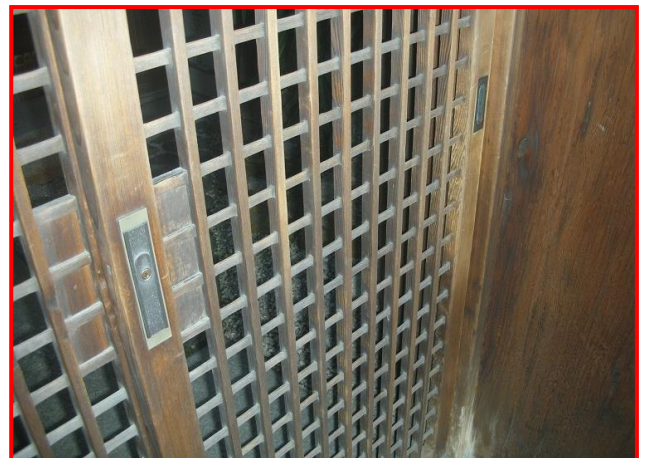
沢山の写真がありましたけどなんとか2ページに収めました。



【撮影、記事 会員 雨森】



【小さいけれど品格ある玄関上り口】



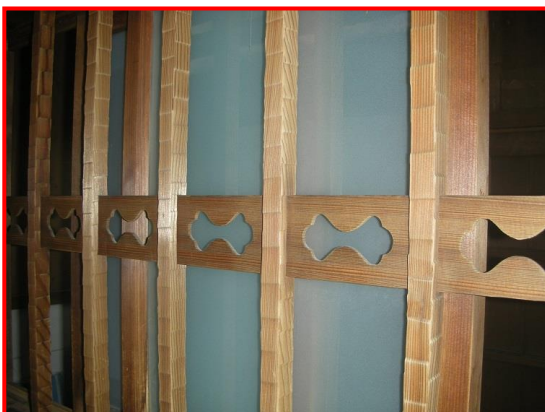
【大塀造り表の格子戸良く掃除され格子が磨り減っています】



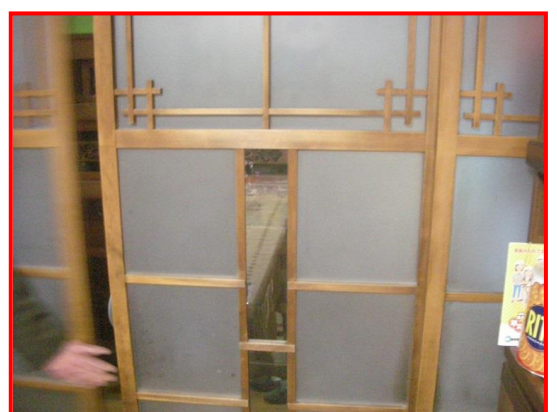
【細かい細工の組子欄間】



【杉玉杓を生かした見事な天井板】



右の写真は台所へのガラス戸と左側はお風呂場の廊下側の窓、どちらも細かな意匠に思わず感動！ 細部にわたってこだわりが見られます。





【一階、二階に其々床の間と違い棚のあるお部屋があります】



上は表玄関格子戸の内側に据えられた杉玉杵の鏡板開き戸。右写真①は新品の様な水屋筆筒。②はお庭に面した廊下側ガラス戸の上部。③二階から一階への階段口の造作。④大塀造りの表庭。⑤明るい日が差す中庭。



【上 中庭に面した座敷の障子戸】

【下 二階表通りに面した座敷の障子戸】



この住宅は昭和2年(1927)に建築され、20年程前に現在の所有者である梅原さんが購入し転居されたそうです。お宅は外観も内部も素晴らしく、使われている良質の木材による建具や造作が本当に美しく輝いているように見えます。

築90年になるこの住宅、特に壁や建具を見ても隙間や扉のゆがみが全くなく、普請の良さが分かると同時に小まめな補修なしにはこれだけ美しく残せないと思うと、先代の所有者も現在の所有者も本当に大事に住まれて来た事が良く分かります。



【大塀造りの出窓屋根は柿の上に銅版が】

【既に解体されたが向側に建っていた住宅】



「大津百町瓦版」からの20周年

瓦版創刊号は



【瓦版1号となった「大津の町家瓦版」平成12年6月】

□大津の町家を考える会は結成(1997.7)からわずか2年目に大胆にも「百町物語」という大津のガイド本ともいえるものを出版しました。

この本は結構な人気があって、大津を知ろうとする多くの方々に読まれ何版か重版を重ねたようです。

□会の情報誌としては「瓦版」の名前ではなく、最初に「長等発町家研究」という学術的なネーミングで対外へのアピール誌が作られました。

□平成12年6月、その翌年に初めて瓦版、「大津の町家瓦版」が発行されました。第一号では、まちなかで活動する商工業者、市民グループ、まちなかに想いを寄せる市民、行政などが一同に会しいろいろな事を語りあう、市民フォーラムの実施を前に参加を呼び掛けています。



【まちづくりの町家センター「大津百町館」呼掛け】

□平成12年末、空き家となっていた旧文泉堂大津支店(現在の「大津百町館」)を貸して戴けることが決まりました。翌年1月から会員中心に4月のオープンに向けて週末毎に10人から15人の会員が、埃とガラクタだらけの中清掃作業を始めました。抜けそうな和室の床、残された多くの備品、ゴミの処理、詰まったトイレ等々3月になっても片付かず、4月のオープンは無理となりました。

□この内部の清掃・改修を「ちょっと体験・町家、見る、なおす」市民参加型のイベントとして、参加費を徴収し体験講座型の障子張り、床板張り、水道工事等の作業を呼び掛けたところ、マスコミ各社の掲載を得たおかげで市民参加も多く、清掃・改修事業が進みました。

□そしてついに6月9日「大津百町館」をオープンさせることが出来ました。オープニングパーティーには70名を超える方々が参加され、まちづくりの拠点完成をみんなでお祝いしました。



【オープニングパーティーを呼掛ける平成13年5月】

□この後、平成14年4月に全く違ったかたちの情報誌「ヒャクチョウ」が創刊されましたが、創刊号のみで終わってしまいました。



【平成15年春号から現在と同じ「大津百町瓦版」となった】

□現在の「大津百町瓦版」と名称を替え再刊したのが上の二つ、B4の4三つ折りで再刊。会員のみの原稿では限界があるので、当時の会長の青山さんはいろんな人と顔を会わす度にこの「大津百町瓦版」への原稿を依頼されていました。

□このB4三つ折り版も遅れ遅れの季刊誌で、平成16年夏号まで3号のみの発行でした。



「大津百町瓦版」からの20周年

□平成17年春号から現在と同じ大きさのA4版で、4ページ～6ページのものとなりました。中身の記事はやはり会長の青山さんがいろんなところで収集して原稿を集めてきてくださいました。

□A4版での再刊表紙は、現在百町館の玄関を入ったところに飾られている、旧大津市街の俯瞰模型の写真でした。これは当時の滋賀県立大学を中心に〇〇名の学生集団が作成したもので、残されている町家を識別した立派なもので大津市役所に展示されました。



【再刊A4版の表紙写真旧大津市俯瞰模型平成17年3月】



【続けて発行された秋季号 夏バージョンの百町館】

□A4版の「大津百町瓦版」は基本6ページになって掲載スペースが広がり、いろんなことが掲載出来るようになってきました。取材は相変わらず青山会長の努力により、沢山の方々から原稿を頂きながらなかなか発行の継続が出来ず、とびとびの再刊続きとなりました。

□平成17年春季号A4版再刊からの発行は、平成24年春季号までの間8年間に5回しか発行出来ませんでした。この間多くの人から寄せられた原稿を改めて読んでみると、再度掲載してもいい内容のものが多くあることに気がきました。順次取り上げていきたいものです。

□『大津の町家を考える会』発足間もない時期から、市民団体として何らかの情報発信は欠かせないものと考え、とびとびで発行してきた「瓦版」ですが平成24年春季号No. 14号より平成30年新年号までなんとか発行を続けてこれました。



【会員投稿 沖縄の民家 平成25年春季号No. 18】



【大津祭で茶行厨を担ぐ人 平成26年秋季号No. 23】



【智証大使生誕1200年法会 平成27年新年号No. 24】

□こうして「大津百町瓦版」は表紙部分を見ても楽しい内容になってきました。取材は旧大津地域だけではなく、大津全域に広がるなど、龍谷大学社会学部が瀬田と中央学区で活動するエンパワ専攻の学生さんにも原稿を依頼するなどして誌面を活用してもらいました。

□記事には、「大津町家を見る知る深める」といった登録有形文化財の紹介をシリーズで連載したり、最近では「町家を残し誇りにしたい」と題した形で、残されている町家にも目を向ける掲載もしてきています。

【季刊誌担当 会員 雨森】

私達は考えているばかりの会です

森川 稔（会員）

「私たちは考えているばかりの会です。考えている間も、町家はどんどん潰れています。」大津の町家を考える会の二代目会長を長きにわたって務められた青山菖子さん（故人）が、自嘲気味によく口にされていた言葉である。

「大津の町家を考える会」は、大津のまちなかに居を構えるお二方の、町家がどんどん壊されていくことへの危機感からスタートした。1997年7月5日に発会式が行われ、様々な立場や年齢の市民が参加することになった。

大津のまちには多くの町家が存在しているが、その当時、町家にスポットが当たることもなく、その存在が評価されることもなかったように思う。町家に光を当てようと、会では町家マップの作製、町家見学会やシンポジウムの開催、書籍「大津百町物語」の発刊などに取り組んだ。しかし、町家がどんどん壊される状況に変わりはなく、「考えているばかり」という言葉を青山さんは口にされたのだらうと思う。



【2001.6.9 百町館オープニングセレモニーの青山さん】

そんななか、「考えているばかりでなく、町家を残すために、自分たちも少しは汗を流そう」と会員のなかから声があがり、会として町家をなんとか残せないか、ということになった。そこで、利用させてもらえそうな町家を探すことになり、見つけたのが、十年近く空き家になっていた現在の百町館である。

所有者さんのご厚意もあり、この立派な町家を格安の料金でお借りすることができた。その後は、市民参加型で改修に取り組み、様々な助成金を得て水回りや屋根を補修する一方、百町館を会場にイベントや勉強会の開催などに取り組んできた。会の活動拠点として、また、町家の良さを知ってもらう場と



【2001.5.12 市民体験講座を取り上げる朝日新聞記事】

して、今日まで多くの方々に来館してもらっている。総合学習の授業として、市内外の小学生も訪れてくれている。

大津の町家が潰れていることに今も変わりはなく、その流れをくい止めることは容易ではない。大津の町家を考える会の取り組みが、町家を守っていくことにどれだけの貢献ができていのかは計りようもない。しかし、市民の力で百町館を開館させ、今日まで管理運営してきたことは、小さな取り組みかもしれないが、大いに評価されてよいことだろうと思う。

「考える」だけから一歩踏み出し、汗を流すことによって「まちづくり大津百町館」を生み出すことができた。「Think」から「Do」である。汗を流すことの大切さを、百町館の取り組みから学んだように思う。



【2001.5.19 市民参加型による改修工事の様子】

萬塾

大津の近代建築を巡る 今も人気のある大津絵は

「大津の町家を考える会」が主催しています、大津を知るまちなか講座『萬塾』は昨年いろいろな行事が重なりいつもより少ない二講座の開催となりました。

10月1日「大津の近代化建築を巡る」

大津の近代化遺産として有名なのは、びわ湖疏水、逢坂山トンネルがよく知られていて話題にもなりますが、では近代化建築は？

講師の石田潤一郎氏は京都工芸繊維大学の教授で、「湖国のモダン建築」「関西の近代建築」等々の著作も多くあり、以前は滋賀県近代化遺産総合調査委員長を務められるなど、現在も滋賀県、大津市の文化財専門委員を務められている方です。

明治期の滋賀県庁やその後の大津市役所等々すでになくなった建築物を紹介され、昭和の時代になっての新県庁、その横に建つ武徳殿、大津市公会堂などをパワーポイントを使って解説。また、湖岸に建築された旧琵琶湖ホテル、南郷洗堰監視所、今年びわ湖周航の歌100周年で話題になった、びわ湖疏水取り入れ口に建つ第三高等学校端艇部艇庫。ヴォーリス設計の教会や個人住宅建物についての映像と話など、多くの貴重な近代建築の映像を観てお話を聞き改めて大津の素晴らしい近代化建築を知ることができました。



【旧大津市公会堂】

10月21日「今も人気のある大津絵は」

大津絵は現在も結構な人気があって、本物？の大津絵を求めて大津を訪ねて来られる方も多いです。

大津絵の初めは追分絵、山科絵と呼ばれていたそうで、琵琶湖が全く見えないところで売られていました。江戸時代後期になって旅人が増え、速い安い東海道土産として爆発的に売れ全国に広まったようです。



【大津絵師の墓】

今回の講師は、大津市歴史博物館の横谷賢一郎学芸員にお願いしました。

最初に大津絵の真贋テストに始まり、大津絵の魅力についていろいろ語って頂きました。

「大津の町家を考える会」

20周年記念祝賀会 開かれる

10月28日、「大津の町家を考える会」の結成20周年を祝う祝賀会が、拠点にしている『大津百町館』で開催されました。

当日は設立当初のメンバーや地元商店街の方々、中央学区自治連合会会長をはじめ大津市行政の関係者等々43名の方々の参加を戴きました。

会は初めに大津市歴史博物館の樋爪館長の記念講演からはじまり、面白いお話に一同大津百町のより深い部分を知ることが出来ました。



【竺会長の挨拶】

第二部は祝賀会として、飲み物や料理を手にしてめい



【藤元辰也さんの演奏】

めいが和やかに歓談、会設立当初の苦労したこと、百町館の改修工事のこと、まさに大津百町をこの地域に根付かせたお話がいろいろ出されました。『萬塾』で何時も演奏して頂いてきた、津軽三味線演奏家の藤元辰也さんも駆けつけ、お祝いの演奏をして頂きました。

今年も考える会主催の

まちなか寄席

今年で三回目になる天満天神の会メンバーによる「百町館まちなか寄席」が今年も12月10日に開催されました。いまや上方落語の檜舞台となった天満天神繁盛亭での落語講座で、研鑽されているメンバーお三方が、大津百町館での「まちなか寄席」でその話芸を披露して頂きました。

大津のまちなかで行われる寄席は本当に多くなりました。町家を考える会が百町館で寄席を始めた時は、市民会館での米朝一門の寄席だけでしたが、学生落語



【天満天神の会のお三方】

素人落語、プロ落語といまや大津中心部で落語をやっていない日は無いのではとおもわれるくらい、どこかで寄席がある感じです。



山内博貴が巡る大津の文化財(特別版)

17.11 高穴穗神社

古事記・日本書紀には、第12代景行天皇から第14代仲哀天皇までの宮都として、志賀の高穴穗宮を営んだとしている。ヤマト政権は文字通りずっと大和の一地域が中心であり、なぜがこの3代だけが畿外近江の地に移り、宮都とされる地も長期に亘っている。この近江政権は、神功皇后の「三韓征伐」帰国後に滅ぼされるまで事実上存続したと言われています。

その都の跡地とされ、景行天皇を祭神として祀るのが、大津市穴太の高穴穗神社です。もちろん伝承だけのことで、何か遺跡などが見つまっているわけではありません。史学上は天智天皇の大津宮の政治理想を、過去に投影した創作とする立場も存在するようですが、しかし、伝承であっても2度も「日本の首都」となったことを、大津市民はプライドとしてもっと誇っていると思うのです。「大津京遷都1350年」にわいた今年、ここにももう少し目を向けてよかったのではないのでしょうか。



17.10 宇佐山城

たまたま「歴史秘話ヒストリア」をテレビで見たら、浅井長政のことをやっていました。兵力経済力に圧倒的な差のある織田信長に長期に対抗できたのは、なんと近江各地の浄土真宗の門徒勢力と結んだからだと言われていました。門徒恐るべし・・・。

織田 VS 浅井・朝倉連合の戦いの中で、織田勢が苦しみ苛烈極めたひとつが元亀元年の「志賀の陣」である。連合軍3万に織田方は坂本で迎え撃つも敗北。宇佐山城主の森可成も討死してしまう。連合軍はさらに南下、宇佐山城での攻防戦になりました。宇佐山城自体は攻撃に耐え落城しなかったが、宇佐山の中腹にある宇佐八幡宮は、戦火の巻き添えに会い灰燼に帰してしまう。その戦いの激しさを語る歴史の証人が、写真にある再建前の社殿の礎石なのである。解説板の説明では、火に焼かれた跡があり、宇佐山城攻防戦の際のものだという。こういう文化財を目の当たりにすると、戦国時代がぐっと身近に思えてくるから不思議で

す。宇佐八幡宮はその後仮殿が再建されるが、本格的な再建はなされないまま現在に至っている。



17.12 大津廃寺跡

旧滋賀会館跡地、NHK 大津支局移転予定地のこの更地で、発掘調査が行われていたことを私は知らなかった。先日、大津市歴史博物館で「大津の都と白鳳寺院」展を見に行ったときに、「大津廃寺の古瓦」が展示されていて、大津廃寺って何だ？ と調べてみたのがきっかけでした。

この大津廃寺、発掘報告書も出ておらず、書籍等でも紹介されていないということで（大津市埋蔵文化財調査センターまで行って聞いてみると）、ネット上の拾い情報でしかないのですが、大津市中央3丁目付近を中心に、飛鳥～白鳳期に存在した寺院のようで史料に登場しないため「廃寺」と名付けられ、寺院のものとされる古代瓦が出土しています。

大津の古代史はどうしても大津宮の錦織近辺に遺跡が集中する。現在の中心市街部、大津百町でも古代の活動の営みがあったことに新鮮味を感じた。ちなみに林博通先生によって大津宮の発掘がなされるまでは、ひとつの説として「大津市街地説」がありました。



編集後記

秋季号が出せず休刊となって、この『瓦版』をお待ちいただいた方にはご迷惑をお掛けいたしました。この新年号は8ページ立てで盛り沢山となっています。トップは『萬塾』でお話戴いた石田先生に原稿お願いしました。また、残念ですが北国海道沿いの解体される住宅の写真は本当に貴重です。

【 K. A 】